



石川啄木著

あふか

あ
こ
が
れ

石
川
啄
木
著

明治三十八年五月一日印刷
明治三十八年五月三日發行

あこかれ奥附

定價金五拾錢

著 者

石 川 啄 木

東京市京橋區南大工町五番地

發 行 者

小 田 島 嘉 兵 衛

東京市京橋區南大工町五番地

發 行 者

小 田 島 尙 三

東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

印 刷 者

石 川 金 太 郎

東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

印 刷 所

株式會社 秀 英 舍



發行所

東京市京橋區
南大工町五番地

小 田 島 書 房

啄木

上田敏

婆羅門の作れる小田を食む鴉、
なく音の、耳に慣れたるか、
おほをそ鳥の名にし負ふ
いつはり聲のだみ聲を
又なき歌とほめそやす
木兎、梟や、椋鳥の
ともばやしこそ笑止なれ。

聞かずや、春の山行に
林の奥ゆ、伐木の
丁々として、山更に
なほも幽なる山彦を。
こはそも仙家の斧の音か、
よし足引の山姥が
めぐりめぐれる山めぐり、
輪廻の業の音づれか、

いなとよ、ただの鳥なれど、

赤染いろのはねばうし、
黒斑白斑のあや模様、
紅梅、朽葉の色許りて、
なに思ふらむ、きつつきの
つくづくわたる歌の枝。

げに虚なる朽木の
幹にひそめるけら虫は
風雅の森のそなひぞ、
鉤けて食ひねてらつつき。

また人の世の道なかば

闇路の林ゆきまよふ

誠の人を導きて

歡樂山にしるべせよ。

噫、あこがれの其歌よ、

そぞろぎわたり、胸に泌み、

さもこそ似たれ、陸奥の

卒都の濱邊の呼子どり

なくなる聲は、善知鳥安瀉。

目次

沈める鐘(序詩)	一
杜に立ちて	七
白羽の鵲船	八
啄木鳥	一〇
隱沼	一一
人に捧ぐ	一三
樂聲	一四
海の怒り	一六
荒磯	一七
夕の海	一九
森の追懷	二一
おもひ出	二四

いのちの舟	二九
孤境	三一
錦木塚	
にしき木の卷	三五
のろひ矢の卷	三九
梭の音の卷	四四
鶴飼橋に立ちて	五二
落瓦の賦	五六
山彦	六五
曉鐘	六七
暮鐘	六八
夜の鐘	七〇
塔影	七一
黄金幻境	七三
夢の花	七四

しらべの海	八二
五月姫	八三
ひとりゆかむ	八九
花守の歌	九二
月と鐘	九九
偶感二首	
我なりき	一〇〇
閑古鳥	一〇三
ほととぎす	一〇七
マカロフ提督追悼の詩	一〇八
金甌の歌	一一九
アカシヤの蔭	一二六
ひとつ家	一三二
壁なる影	一三四
鷗	一三六

光の門	一四〇
寂寥	一四五
秋風高歌	
黄金向日葵	一五七
我が世界	一五九
黄の小花	一六〇
君が花	一六二
波は消えつつ	一六四
柳	一六五
愛の路	一六六
落ちし木の實	一六六
秘密	一七二
あゆみ	一七四
江上の曲	一七五
枯林	一九一

天火盞	一九九
壁書	二〇〇
炎の宮	二〇二
のぞみ	二〇四
眠れる都	二〇九
二つの影	二一四
夢の宴	二一七
うばらの冠	二三〇
心の聲	
電光	二三二
祭の夜	二三五
曉霧	二三八
落葉の煙	二四〇
古瓶子	二四四
救済の網	二四七

あさがほ	二四八
白鵲	二四九
傘のぬし	一五〇
落櫛	二五三
泉	二五七
青鷺	二六一
小田屋守	一六四
凌霄花	二六八
草莓	二七四
めしひの少女	二七八

《畢》

あ こ が れ

石川啄木著

沈める鐘（序詩）

一

渾沌霧なす夢より、暗を地に、
光を天にも劃ちしその曙、
五天の大御座高うもかへらすとて、
七寶花咲く紫雲の『時』の輦、
瓔珞さゆらぐ軒より、生と法の

進みを宣りたる無間の巨鐘をぞ、
永遠なる生命の證と、海に投げて、
蒼穹はるかに大神知ろし立ちぬ。

時世は流れて、八百千の春はめぐり、
榮光いく度さかえつ、また滅びつ、
さて猶老なく、理想の極まりなき
日と夜の大地に不斷の聲をあげて、
(何等の靈異ぞ)劫初の海底より
『秘密』の響きを沈める鐘ぞ告ぐる。

朝に、夕に、はた夜の深き息に、
白晝の嵐に、擣く手もなさに鳴りて、
絶えざる巨鐘、——自然の胸の聲か、
永遠なる『眠』か、無窮の生の『覺醒』か、——
幽かに、朗らに、或は雲にとよむ
高潮みなぎり、悲戀の咽び誘ひ、
小貝の色にも、枯葉のさゝやきにも
ゆたかにこもれる無聲の愛の響。

懐める心に、渴ける靈の唇に、
滴り玉なす光の清水めぐみ、
香りの雲吹く聖土の青き花を

あてがれ戀ふ子に天なる樂を傳ふ
救濟の主よ、沈める鐘の聲よ。
ああ汝、尊とき『秘密』の旨と鳴るか。

三

ひとたび汝が聲心の絃に添ふや、
地の人百たり人爲の埒を超えて、
天馬のたかぶり、血を吐く愛の叫び、
自由の精氣を、耀く靈の影を
あつめし腫に涯なき涯を望み、
黄金の光を歴史に染めて行ける。
彫る名はさびたれ、かしこに、この丘に、